

教育相談研究
教育相談研究部

研究主題

児童生徒の適応力を高める手立てと体制づくり

柳瀬小学校	服部 環 (リーダー)
山口小学校	大森 恵
向陽中学校	新井 朱夏
美原中学校	森田 幸江
南陵中学校	小澤 真未

指導者 早稲田大学 講師
野村 和孝

担当指導主事
大庭 真紀子

教育相談研究員の研究によせて

早稲田大学人間科学学術院 講師 野村 和孝

学校教育に限らず、多くの現場において「問題」が起きてからの対応に追われ、多くの労力が割かれてしまった結果、予防的な取り組みを十分にすることができず、さらなる「問題」が起きてしまうという悪循環に陥ってしまうことが少なくありません。もちろん、「問題」が起きてしまうことを完全に防ぐことは難しく、「問題」の対応に多くの労力を割くことは必要不可欠です。一方で、そのような中であってこそ予防的な取り組みを十分に検討することが、良循環に変えていくための手立てになるのですが、そのようなことに取り組む余力がないという場合があるのも確かです。

教育相談研究部では、「『問題』が起きる前にもっとできることがあったのではないか？」という教育相談研究員の強い想いが原動力となって、平成30年度から主体的・対話的で深い学びの視点からの指導の工夫として「児童生徒の適応力を高める手立てと体制づくり」の研究に取り組んできました。研究に取り組むにあたり、前任の教育相談研究部の研究成果を活かしつつ、さらに予防的な手立てを拡充することを狙いとししました。特に、「問題」が起きていない時の児童生徒の適応力を高める手立てとして、ついつい見落としてしまいがちな児童生徒の様子を整理し、現場での実践においてなるべく労力を割かずに済む方法の検討に力を入れてきました。

具体的には、教育相談研究員が各自の学校の先生方に協力を求め、経験的に将来適応上の問題を抱えることが予想される児童生徒の特徴を整理するとともに、小学校と中学校の引き継ぎ方法について検討を行うなど、主に下記の3つに取り組みました。

- ①「気になる児童生徒への支援チェックシート」の実践
- ②「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の作成
- ③「小中連携引き継ぎチェックシート」の作成

これらの検討にあたり、教師の視点をボトムアップで整理を試み、さまざまな経歴を有する先生方が経験的に培ってきた児童生徒を見る視点を明文化したところに、今回の研究の独自性と強みがあると思います。全ての内容が必ずしも新しい知見であるというわけではないかもしれませんが、経験的に行われてきた部分が、具体的な項目として整理されたのは現場での実践にもつながる非常に有用な取り組みであったと思います。

今後、さらに精度を高めていくことが必要であり、単発の研究として終わることなく、継続的に取り組まれることが期待されます。一般に、研究は、1つの研究で完結することはほとんどなく、多くの研究が複数の取り組みの積み重ねの中で、大きな成果につながっていきます。そして、私自身も様々な施設での研究に取り組んできましたが、その都度、研究がまとまるまでに関わる人の多さに驚きと感謝を感じ、1つ1つの研究の向こう側に一体どれだけの人がいるのか、そしてどのような想いが込められているのかをいつも考えさせられます。今回の研究も多くの人の協力の上になりたっていますが、さらに多くの人を巻き込む中でより現場の実践に役立つ研究につながっていくことを期待してやみません。

教育相談研究部

I 研究主題

児童生徒の適応力を高める手立てと体制づくり

II 主題設定の理由

「小学校で普通に登校していたのに、中学校で不登校になった。どうしてだろう……。」

「私たちは、もっと早く何かできたのではないか。」

「何かが起きてからでは遅いので、その前に気付いてあげたい。どうすれば気付けるのだろうか……。」

これらは、研究員6名で初めて集まった時の会話の一部である。

各学校においても、不登校予防や不登校児童生徒の早期復帰に向けての支援に尽力してきた。しかしながら、様々な家庭や社会的な環境の複雑化により、多くの学校が苦慮している。校内では、経験年数の浅い教員が増え、校内での情報共有や連携が課題となっている。本市の不登校の割合は、県の割合（平成29年度は小学校0.37%、中学校2.84%）と比べると、過去10年以上、上回っている。

そこで、本研究部では、平成29年度教育相談研究部の「すべての児童生徒への教育相談的手法の研究」や所沢市教育委員会の「所沢市不登校児童生徒支援基本方針」「所沢市不登校児童生徒支援マニュアル」等を踏まえ、さらなる不登校の早期予防・早期発見の手立てを明確化するために本主題を設定した。

III 研究の方法及び内容

1 研究の方向性

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①「気になる児童生徒への支援チェックシート」の実践②ポスト気になる児童生徒への支援チェックシートの作成③小中連携引き継ぎチェックシートの作成 |
|--|

① 「気になる児童生徒への支援チェックシート」(別紙参照)の実践について

平成29年度教育相談研究部の成果物である「気になる児童生徒への支援チェックシート」は、教員が教育相談的支援の視点でスクリーニングできるようになることを目的として、作成されたものである。そこで、本チェックシートの支援を実際に活用し、有効性を研究することにした。

② 「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の作成について

①の研究を進める中で、教育相談的支援の視点(項目)が、発達の問題に特化していることに気付いた。しかしながら、各校の現状を踏まえると、発達の偏りに関係なく、普段の学校生活から学級内での不適応を教師の視点で拾っていくことが、不登校の早期予防・早期発見につながるであろうと考えた。また、今後不適応を起こす可能性のある児童生徒を、発達の問題以外の視点からも早期に見つけることが必要であると考え、児童生徒の状態像を理論的に4つに分類した。この分類を分かりやすくするため、カテゴリーごとに「ブラック・グレー・ポストグレー・ホワイト」と色分けグループの呼称をつけた(表1参照)。このように4グループに分けることで、既に不適応を起こしている児童生徒だけでなく、現在は元気に登校できている児童生徒にも予防的視点を向けられるようになるで

あろう。また、見立ての基準を具体的に設けることで児童生徒の状態像がより明確になるため、教員の年齢や経験年数、校種に関係なく、様々な児童生徒を拾い上げることができるであろうと仮説を立てた。その後、これらの仮説を検証しながら①のチェックシートの増強版として、「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」を作成した。

③ 「小中連携引き継ぎチェックシート」の作成について

小学校では何の問題もなかったように見えた児童が、中学校で不適応を起こす場合がある。特に、中学校に入学してから不登校になる生徒が多いと聞く。そこで、小学校と中学校でさらなる連携が必要であろうと考え、小学校1年生から6年生までの6年間の細かな情報を引き継ぐための「小中連携引き継ぎチェックシート」を作成した。

グループ名	児童生徒の状態像	見立ての基準
ブラック	問題が顕在化し、不登校の状態にある。	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校である。 ・教育相談部会や生徒指導部会で名前が挙がっている。
グレー	登校できているが、何らかの不適応を起こし始めている。	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な配慮を要する。 ・月4日以上欠席がある。 ・医療機関にかかっている。 ・教室の授業や活動に参加の日がある。
ポスト グレー	現在は元気だが、将来（次学年や進学先）不適応な状態を引き起こす可能性がある。	
ホワイト	学校生活に問題なく、元気に適応できている。	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に1日いることができる。 ・授業時間に1日いることができる。 ・月3日未満（年間30日未満）の欠席日数である。 ・継続的な通院はしていない。 ・特別な配慮を受けていない。

表1 学級における児童生徒の状態像（4分類）

2 研究の方法

① 「気になる児童生徒への支援チェックシート」の実践について

5校の小中学校で支援を実践してもらい、効果を測った。

② 「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の作成について

各校で不登校状態にある、もしくは学校不適応を起こしているブラックやグレーのグループに分類される児童生徒の過去の様子（学校での気になる言動）を教員に聞き取った。そして、挙げられた特徴をKJ法で分類し、ポストグレーの児童生徒を発見するためのチェックシートの項目を決めた。さらに、2度の調査を経て、この項目を修正した。最後に、各項目に対する支援の手立てを各校で聞き取り、①のチェックシートを増強した本チェックシートを作成した。

③ 「小中連携引き継ぎチェックシート」の作成について

各校でどの程度小中連携が行われているか、情報を収集した。さらに、中学校の教員からどのよう

な情報が有用か聞き取り、KJ法で分類した。これらをもとに「小中連携引き継ぎチェックシート」を作成した。そして、実際に研究員の学校の先生方にシートを記入してもらい、改善点を洗い出した。

IV 実践例

① 「気になる児童生徒への支援チェックシート」について

【目的】「気になる児童生徒への支援チェックシート」に挙がっている支援策で特に有効だった手立てや実際に実践した先生方の意見を整理することで効果を測り、より活用しやすいものにする。

【方法】調査対象：小学校2校、中学校3校の計5校

調査方法：2週間程度、チェックシートに該当する児童生徒への支援の手立てを実践してもらい、その効果と感想を先生方から集める。

調査結果：気になる児童生徒への支援について、「共通しているもの」「生活（対人）」「学習」の3つに分けて実践し、整理した。（表2～4）

	特に有効だった手立て (小学校/中学校)	実践した感想やコツなど
ア 集団行動が苦手	小：活動の見通しをもたせる。 中：訓練を積み重ねていく。	小：声のかけ方やタイミングが大事。 中：縛り過ぎずに繰り返して自信をもたせるとよい。 中：持続させることが難しい。
イ 行動が遅い	小：タイマーを活用する。 小：周囲が自然と手伝える雰囲気をつくる。 中：時間を意識できる生徒に負担のない範囲で声をかけてもらう。	小：教師が、個だけでなく全体を優先することで自然と集団行動ができるようになった。 小：昨年よりタイマーを活用し、守れている。 小：そもそも時間の感覚がないことが問題。 中：仲の良い子と一緒に動いてもらうと効果があった。
ウ 忘れ物が多い	小：連絡帳やメモを活用する。 中：重要な提出物は鞆の目立つ所に目立つ物を入れ、「何でこれが入っているのか？」→「提出物だ！」と思わせる。鞆を開けない生徒は鞆の持ち手など、外に普段つけない物をつける。	小：チェックリストはよいが、持続が難しい。周期的に方法を変えるとよいかも。 中：保護者とのつながりがあると助かる。
エ 指示理解が苦手	小：見通しがもてるよう、活動の順序等を掲示する。 小：指示内容を可視化する。 中：個別に指示する。	小：個別に説明するとできるが、普段はできないことが課題。しかし、「関係づくり」には有効。 小：視覚化することで理解できた。 中：手遊びなども制止してから指示を出す。
オ 姿勢が悪い	中：姿勢がよい時のメリット、悪い時のデメリットを説明する。	小：他の人が褒められても関係ない。声掛けに敢えて応じない。 中：「具合悪い？」は効果あるが、多用しないほうがよいのではないか。 中：姿勢を正すときちんと取り組む。
カ こだわりが強い	小：1日や1時間の学習の流れを目で見えるように掲示する。	小：前の黒板に時間割を提示する。 小：学習の構造化は有効だが児童によるかもしれない。 中：自分の世界を持っているので、こちらが話しても変わらない。 中：他の生徒にも個性を認めるよう話すことで、学級全体が落ち着いた。
キ おしゃべり	小：何度か続けて指名する。 小：静かになるまで待つ。 中：座席位置の配慮をする。	小：座席は重要。必ずしも1番前がよい訳ではない。 小：卒業式など、場に応じて考えると効果がありそう。 小：本人も含めて、学級で話し合うことが重要。 小：さりげなく褒めると効果的。 中：静かになるまで指示を出さない。他人の時間を無駄にしていることに気付かせる。

表2 「共通しているもの」の実践結果

	特に有効だった手立て (小学校/中学校)	実践した感想やコツなど
ク 友だちとのトラブル	小：複数で本人の話を聞き、日頃から様々なサポートをしてもらえるようにする。 小：何がよくて何がダメなのかをはっきりさせる。 中：本人と約束づくりをする。	小：まずは、SSTができる学級の状態をつくりたい。 小：「自分は悪くない。」とっていると、話を聞くのに時間がかかる。 中：クールダウンし、冷静に考えさせる。
ケ カッとしたりやすい	中：別室でのクールダウンを促す。	小：特定の教師のところではクールダウンをするのは効果的だが、依存的になってしまう可能性もある。
コ 整理整頓が苦手		小：自分の物なのに、「僕のじゃない、ゴミになっていい。」と、物への執着心がないのではないか。 小：「できたらシール」作戦にした。
サ 机の上が乱雑	中：机に出す物が少なくなるように指示する。	中：机の上にスペースができ、やりやすくなることを実感した。

表3 「生活(対人)」の実践結果

	特に有効だった手立て (小学校/中学校)	実践した感想やコツなど
シ 低学力	小：座席の位置を配慮する。 小：具体物を使う。 中：隣の席に面倒見のよい子をつける。 中：反復学習を行う。	小：「先生とそっくり同じように映しましょう。」と声をかけるとよい。 小：リズムで覚えたり教えたりできるとよい。 小：保護者は低学力をあまり認識していない。 小：個別にするとできるが、時間がかかる。担任だけでは厳しい。 中：友達に教えてもらうことで前向きに取り組めた。 中：面倒見のよい生徒の気持ちにも配慮したい。
ス 立ち歩きが多い		小：座席を配慮しても立ち歩く。 小：複数での対応を考える必要がある。
セ 落ち着きがない	中：目を合わせる機会を増やす。	小：お手伝いやお願いをすると、次も頼まれたくて自発的に頑張ることができた。
チ 字形が崩れる		小：はじめは花丸が欲しく頑張るが、続かない。
ツ 不器用	中：一緒に作業したり周囲が自然と手伝える雰囲気を出したりする 中：指示は段階を追った細かいステップで丁寧に出す。	小：図工は途中まで作って示すと、続きは自分で作ることができた。 中：友達と協力すると活動できた。

表4 「学習」の実践結果

【考察】 成果 (○) と課題 (△)

○ チェックシートの1・2ページ目の絵・表からクラスの「気になる子」を見つけて手立てに進む仕組みが分かりやすく、手立てをしぼって取り組むことができた。

→サイト上でクリックしたら手立てに進むなどできると、さらに活用しやすくなるを考える。

△ 個々の児童生徒に応じた手立てが必要であり、時と場合によって、昨日有効だった手立てが今日うまくいかないこともある。手立ての継続の難しさ(時間・人員不足)や、同じ手立てを続けることで逆にマンネリ化して効果が出ない場合もある。

- 手立ては1つだけでなく、いくつか試みて、本人の状態に合うものを探すことが大事である。
- 学校だけでなく、保護者にも紹介して活用してもらえると、なお効果的であると考える。

②「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」について

【調査1の目的】

「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の項目が適切か、整合性を検討する。

【調査1の方法】

市内小中学校の教職員15名（教職経験の浅い4名、教職として相応の期間を経過した5名、教職として十分な年月を経た5名、相談員1名）を調査対象とした。調査内容としては、11項目の「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート（図6）」と「気になる児童生徒への支援チェックシート」および印象評定ⁱへの回答を求めた。回答にあたっては、経験の異なる教職員3名が1つの学級を評価するように求め、5つの学級を計15名で評価した。なお、外的基準ⁱⁱに基づく、児童生徒の適応状態の記述を目的として、教育相談部会や生徒指導部会対応の有無、特別な支援の有無、医療機関の利用の有無、月3日以上欠席の有無、教室不参加の有無、および授業不参加の有無の情報を収集した。

【調査1の結果と考察】

「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の項目について主成分分析ⁱⁱⁱを行ったところ、固有値が2.44、寄与率が22.18%となった。また、項目3・4・8・11の主成分不可料が「.40」以下であり、項目を再検討する必要があることを示す結果であった。

【調査2の目的】

「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の信頼性と妥当性^{iv}についてさらに検討する。

【調査2の方法】

調査対象は、調査1と同じ条件の教職員12名とした。調査内容は、調査1の結果を踏まえて修正を行った12項目の「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート（表7）」、および印象評定への回答を求めた。なお、回答方法と外的基準の情報収集については、調査1と同様に行った。

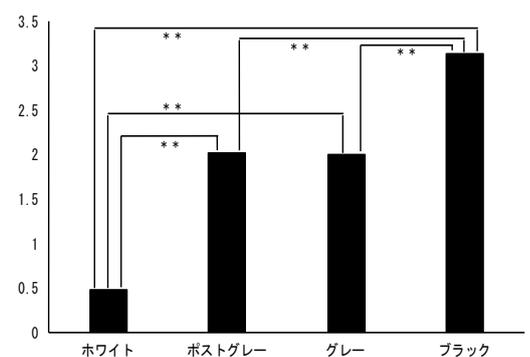
【調査2の結果と考察】

「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の項目について主成分分析を行ったところ、固有値が2.86、寄与率が23.85%、項目1・4・7・9・11の主成分不可料が「.40」以下であったが、調査1の値と比較して、いずれの値も上回る結果であった。また、Cronbachの α 係数は、0.69という値であり、調査1の値（0.62）と比較し、高い値であった。

これらの結果から、いずれの分析結果も十分な値に達してはいないものの、調査1からの改善が確認されたため、今後のさらなる検討を課題としつつ、本研究では次の分析も行った。

「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の妥当性を検討することを目的に、印象評定（ブラック、グレー、ポストグレー、ホワイト）を独立変数、ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート得点を従属変数とした1要因の分散分析^vを行った。その結果、印象評定の主効果が有意^{vi}であった（ $F(3.404) = 46.65, p < .001$; 図5）ことから、ポスト気になる

図5 印象評定別のポスト気になる児童生徒へのチェックシート得点



児童生徒への支援チェックシート得点は、ホワイトとブラックとの弁別を可能にする可能性が示唆された。

1	声が小さい
2	提出物を期日に出せないことが多い
3	体調不良を度々訴える
4	本人が我慢できないほど苦手なものがある
5	特定の友達としか関われない
6	給食をいつも残す、または極端に減らす
7	課題が進まない
8	プライドが高い(テストの点数や勝敗へのこだわり)
9	話す自己表現が苦手である
10	コミュニケーションが上手くはかれない (視線が合わない、会話が一方通行など)
11	家族や友人など身近な人に不登校経験者がいる

1	声が小さい
2	コミュニケーションが上手くはかれない (視線が合わない、会話が一方通行、空気が読めないなど)
3	提出物を期日に出せないことが多い
4	体調不良を訴える(月に複数回)
5	本人が我慢できないほど苦手なものがある (特定の人や場所、教科や活動、環境の変化など)
6	特定の友達としか関われない、グループ作りで最後になってしまうことが多い
7	給食をよく残す、または極端に減らす
8	課題が授業時間内に終わらない
9	結果にこだわる(テストの点数や勝敗など)
10	口答による自己表現が苦手である (自分で物事が決められず悩みがちである)
11	家族や友人など身近な人に不登校経験者がいる (登校しぶり、よく休む、不登校傾向)
12	家庭環境に問題がある(過干渉、不干渉、不仲、精神不安定など)

表6 調査1でのポスト気になる児童生徒への支援チェックシート

表7 項目修正したポスト気になる児童生徒への支援チェックシート

③「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」の手立ての作成について

前頁で示した「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」で抽出した児童生徒に対し、どのような支援を行うことができるか検討した。手立ての作成にあたり、(1)＜組織として＞・＜担任や教科担当として＞の支援の2つに分類して示す (2)手立ては端的で具体的な言葉で示す (3)チェックシートの項目ごとに複数示すことの3点を作成の方針とした(表8)。

	教育相談部研究員	校内の先生方	手立て
1	<p>声が小さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰も責めない、聞こうとしている雰囲気作り ・一緒に発表してくれる子をつける。 ・みんなが一人で声を出す機会をつくる(授業の中で 六送会や卒業式など行事で) ・普段から、周りの児童生徒の聞く力を育てる。 ・朝の会や帰りの会の司会を順番にやる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読を活用し、声を出す機会を多くする。 ・小グループでの発表や話し合いを取り入れる。 ・休み時間に担任も交えてのおしゃべりをする。 ・ソーシャルスキル 友人づくりのための台本をつくりパートナーとなる子どもと会話の練習。 ・自分の意見を他の子に発表してもらって賞賛を得て自信につなげる。 ・全員発表の前にグループやペアでの発表をはさんでいく。 ・「もう一度言って」と言わず先生が代弁してあげる。 ・聞きなおしをできるだけしないようにそばで聞く。クラスへ代弁してあげる。 ・休み時間など本人がリラックスしているときに、声をかけ、話しやすい相手になるようにする。 ・聞き取りやすい声の大きさの時は、褒める声かけをする。 ・ホワイトボードの活用(クラス全員で) ・家での様子の聞き取り ・誰も責めない、聞こうとする雰囲気作り、みんなが一人で声を出す機会をつくる、という機会を多く持つことが必要。 ・授業や委員会活動で、発表した後、その子どもが自信を持てるような教員のフォローを一言でいいからいれる(「そうだね!」とか他の生徒にもわかるように教員が音声を発する。) ・自信をつけさせる(発表した後の声掛け、生徒の発言を否定しない) ・小集団の中での発表から始める。スモールステップをつかって、発 	<ul style="list-style-type: none"> ① 発言・発表の機会を意識的に取り入れる。 ② 声の大小に関係なく、色々な発表の仕方を取り入れて、声の大小に関係なく、発表できたことをほめる。(音読、SST、グループペア) ③ 本人への配慮だけでなく、環境作りが必要である。 ④ 周りの児童生徒の聞こうとする態度なども同時にほめる。

表8 ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート・手立て一覧(一部抜粋)

【考察】 成果 (○) と課題 (△)

- 「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」と手立てによって、学校不適応を起こしそうな児童生徒を未然に発見し、支援を働きかけることが期待できる。
- △作成したチェックシートと手立てをよりよいものにするために、チェックシートと手立ての双方の項目に対する評価・改善を継続することが重要である。
- △校内における手立てを提案することはできたが、家庭での支援については検討できていない。不登校予防には、家庭内での支援の手立てを構築・実践することも有効であると考え。今後の課題として、保護者が行う支援の手立ても提案できるとよい。

-
- i ポストグレーに該当する児童生徒か、調査対象者の感覚的な印象による判断。
 - ii 図1で示した色分けグループの定義の基準。
 - iii 複数の項目の検討を容易にする目的として、得られたデータに基づき、複数の項目を少数の要素(成分)にまとめるための分析。少数の要素(成分)にまとめることで、複数の項目と多数のデータの中で見えにくくなってしまっている傾向を明らかにすることができる。本研究では、複数の項目がポストグレーという成分に集約することを目的としており、集約の可能性について検討した。主成分分析は、固有値や寄与率といった値に基づき判断をする。固有値は「1以上」、寄与率は「80パーセント」を超えるとよい値であるとされている。また、各項目の主成分不可料は、「.40」を超えるとよい値であるとされている。
 - iv 信頼性と妥当性とは、テストの良し悪しを判断する基準である。信頼性とは、テストによる測定が一貫性と正確さを持つかどうかを指し、同じ対象に対していつも同じ得点が出るということを意味する。例えば、同じ対象に対して実施する度に異なる点数となる場合は、信頼性が低いテストとなる。一方、同じ対象に対して実施する度に同様の点数となる場合は、信頼性が高いテストとなる。Cronbachの α 係数という数値によって測定され、1に近いほど良い値であるとされている。妥当性とは、測定された得点がテストの意図としているものを的確に反映しているかを指し、測定したいものを測定するテストであるということの意味する。例えば、算数の実力を測定したいにも関わらず、内容が歴史の知識を問う問題になっている場合には、妥当性の低いテストとなる。一方、算数の実力を測定したい時に、計算問題で構成されている場合には、妥当性の高いテストとなる。
 - v 分散分析とは、平均値と比較する統計的分析の手法の一つである。p値が0.5以下の場合に、平均値に差があることが偶然ではない可能性が高いと判断される。なお、比較したいグループを「独立変数」、比較したい値を「従属変数」と呼ぶ。
 - vi 意味があると判断できること。

④「小中連携引き継ぎチェックシート」について

【作成過程】

- (1) 各校がどのくらい小中連携を行っているか、状況を整理する。市内外問わず、小中連携が進んでいる地域の情報を収集し、共有する。
- (2) 中学校の教員から、入学前に把握したい情報を聞き取り、その内容をKJ法で分類する。
- (3) 分類したものをもとに、「小中連携引き継ぎチェックシート」を作成する。
- (4) 「小中連携引き継ぎチェックシート」を小学校の教員に記入してもらい、改善点を洗い出す。
- (5) 改善点をもとに、「小中連携引き継ぎチェックシート」を改訂する。

小中連携引き継ぎチェックシート

児童名()

項目 該当欄に1(※1~5)を入力し、☆のある項目は、備考に追記する。		小1	小2	小3	小4	小5	小6
担任名【右の枠内に入力してください】							
基本	リーダー性がある						
	ピアノの伴奏ができる						
家庭	低学力である						
	運動が不得意である						
	保護者自身に課題がある ☆詳細 (人間関係、MP、心や身体の病気、日本語が難しい等)						
	家庭環境に課題がある (連絡が取れない、集金が出ない、 養育困難、DV、不仲や別居等) ☆詳細						
	幼稚園・保育園に行っていない						
相談歴	配慮を要する兄弟がいる(不登校、病気など)						
	就学時健診で気になる様子があった(再テスト)						
	保護者と個別に相談したことがある(WISC)						
	医療機関や相談機関に行ったことがある※ 1:児童相談所 2:医療機関 3:こども相談センター 4:その他						
校内で、保護者に就学相談を勧めた結果※ 1:受ける前に拒否 2:受けて通常「適」 3: 4:受けてフロー「適」 5:受けて結果も出た							
支援プラン(A・B)を次年度に引き継ぎをした							

簡単に答えられるよう、数字で回答できるようにした。

項目別にし、見やすくした。

小学校1年生から6年生まで、1つのチェックシートで完結できるように作成した。
中学校への引継ぎだけでなく、小学校内の情報共有もできるようにした。



登校状況	1年間で10日以上欠席や遅刻・早退がある						
	登校(登園)しぶりがある						
	特定の曜日に欠席が多い						
	体育の見学が多い						
保健室によく行く							
編成	同じクラスが望ましい子(親)がいる【右欄に名前入力】						
	違うクラスが望ましい子(親)がいる【右欄に名前入力】						
	苦手な大人のタイプがある ☆詳細						

小学校1年生の段階で登校しぶりがあった場合、中学校でも躓く可能性があるため、このような設問を設けた。

記号だけでは伝わらないことを、裏面に備考欄をつけることで記述できるようにした。

表9 小中連携引き継ぎシート

【考察】 成果 (○) と課題 (△)

○小学校から中学校への情報共有だけでなく、小学1年生から6年間の引き継ぎ資料としても役立つこ

とができる。さらに、小学1年生の情報からさかのぼることができるので、教員の異動があっても情報を手に入れることができる。

○中学校では、「小中連携引き継ぎチェックシート」の情報を知っておくと、一人一人の対応に生かせるのでよい。

△記入に手間や時間がかかるため、学級全員分となると大変である。なるべく手間がかからないよう、記述欄を減らしたり、簡単に答えられる方式にしたりできるとよい。また、年度末だけでなく、いつでも記入できるようにデータを管理し、計画的に入力するとよい。(C4th上に入れる等)

△家庭の状況など分からないことがある。教員の負担にならないよう、分かる範囲で記入するとよい。なお、家庭に話を聞いて記入する際は、十分配慮が必要である。さらに、集めた個人情報には、管理など取扱いに十分注意する必要がある。

△すでに独自に作成した資料を活用している校区もあるため、市内で形式を統一することは難しいと考える。本シートの成果を発信することで、徐々に先生方の関心を高めていきたい。

V 研究のまとめと今後の課題

児童生徒が不適應を起こすのはなぜか。学校現場の実情からすると、どのようにしたら不適應を起こす児童生徒が見つけられるのかポイントがわからなかったり、そこまで見取る余力がなかったりなど、複数の課題が考えられる。実際、「今現在、問題がないところに労力を割けられるか。」と聞かれたら、多くの教師は、「目をかけたくてもかけられない。」と答えるのが現実であろう。しかしながら、『問題が出ていないところにも目を向ける』という視点をもつことが、教育相談や生徒指導においては、特に大切であると本研究で分かった。その際、教員は指導的な視野ではなく、支援的な視野をもつことが大切である。また、どの児童生徒も不適應を起こす可能性があるということも、常に頭の隅に置いておかなければならない。これらのことを前提に、以下に研究の成果と課題を記す。

今回の研究を通し、各校の不登校支援の現状や課題を共有することができた。また、その中で小中学校間での連携の重要性を再認識することができた。そして、教員として、児童生徒が学校不適應を起こす前に何らかの気付きをもつことができるのではないかと感じた。教員個々の主観や無意識に行っていた日頃の指導を見直すきっかけとなり、どの児童生徒もポストグレーに当てはまる可能性があるという事実気付いたことで、危機感をもつきっかけとなった。

研究を進めていく中で、ポストグレーとグレーの児童生徒の割合が非常に多いことが分かった。手立てを実践する際は、学級や児童生徒の実態に合ったものを選択する必要がある。本研究では、実践の検証がまだ十分ではないため、さらなる実践の検証を行うことが求められる。本研究部の成果物である「気になる児童生徒への支援チェックシート」及び「ポスト気になる児童生徒への支援チェックシート」を用いることで、年齢や教職経験年数などに関係なく、客観的に児童生徒の状態をチェックでき、いろいろな支援の手立てを試すシステムが構築できた。今後、このチェックシートをより有用なものにするためには、実践・評価・見直しを繰り返していく必要がある。また、チェックシートを形骸化することなく活用しやすいものにするには、学校生活で不適應を起こす児童生徒を未然に防ぐのはもちろんのこと、教員の働き方改革にもつながると考える。そこで、C4th等を活用し、すべての教員がすぐに見られる環境を作ることができるとよいであろう。

「小中連携引き継ぎチェックシート」は、学校間の細かな情報共有ができ、中一ギャップを防ぐために効率的かつ実用的なものになった。また、小学校6年間の引き継ぎにも役立ち、児童理解を深められる内容となった。ただ、これまで使用していた形式に比べ、小学校側の負担感は大きくなっているため、今後は、この負担感が軽減できるよう、大枠は長期休暇に計画的に記入するなど、工夫する必要がある。さらに、実質的に小中連携に役立てるためには、本チェックシートの有用性を理解してもらい、実際に活用を広めていくことも大切である。

以上のように、本研究を通し、新たな知識を学んだり、教育相談的視野を広げたりすることで、これまでの教職経験を振り返る大事な時間となった。また、一人では思いつかなかった解決策を他の研究員から学ぶことで、安心感がもてるようになった。これからは、先生方が一人で抱え込まず、本チェックシートを片手に仲間と共有し合い、自信をもって教育相談にあたれるよう、この成果を市内に広めたい。すべての児童生徒が学校生活で不適応を起こすことなく、充実した学校生活を送ることを心から願っている。終わりに、2年間御指導いただいた野村和孝先生、並びに貴重な機会を頂いた各学校長様、担当指導主事様の御支援・御協力に心より感謝申し上げます。